
君といた時間

廣野ミヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君といた時間

【Nコード】

N0079P

【作者名】

廣野ミヤ

【あらすじ】

大学生になった僕と彼女との出会いを描いた物語

彼女が【彼女】になった日（前書き）

人はどんなに後悔しても時間を戻せない、それを伝えたい作品なので、これを読んだ人が今の自分の人生を後悔にしないように精一杯生きようと思ってくれば幸いです。

彼女が【彼女】になった日

———いまさらどれほど後悔しても結果なんて変わるわけもなく、過去に戻りやり直したいと願いつつも、きつと過去に戻っても同じ事を繰り返す。そんな事を考えながら君といたあの時間を思い出す———

「あの映画好きなんですか？私も大好きなんです。いやあ、あんな映画好きだなんて珍しいですね。よかったら今度語りましょうよ。」
そういつて彼女は僕に話しかけてきた。僕は驚いた。なぜならその映画は、普通の女の子が見るには内容が若干グロテスクであり、R指定が入っている映画だったからだ。しかし、驚きもすぐに冷め、僕はこの共通の趣味を持つ彼女に興味をもった。
それが、僕と彼女の初めての会話だった。

彼女はこの春から僕が通う事になった地方大学の同じクラスの娘で、出身も地元だと言っていた。

僕は彼女とはとても趣味が合い、好きな漫画や好きなアニメ、好きな映画から好きな俳優まで、そのどれもがほとんど一緒だった。
二人が仲良くなるのにあまり時間はかからず、僕は彼女にどんどん惹かれていった。

あるとき、初めて彼女と喋った理由になった映画の続編が公開されるというので、僕は思い切って彼女を映画に誘ってみた。すると彼女は

「私も見に行きたかった、誘ってくれてありがとう」

といい、その映画を見に行くのを了解してくれた。

僕はその映画を見に行くのも非常に楽しみだったが、彼女と一緒に行ける・・・という事の方が嬉しく、彼女が了承してくれた事に対

して、一人でガッツポーズをした。

彼女と映画を見に行く日、僕はかなり気持が高ぶっていた。大学の講義も身に入らず、ずっとその時間が来るのを上の空で待っていた。

そしてついに約束の時間、僕と彼女は映画館行きのバスに乗り、映画館へと向かった。

「今回の映画楽しみだね、俺昨日、今日の映画が楽しみで全然寝れなくて、前作までのシリーズを4つ全部観てたよ」

「……無論映画が楽しみで寝れなかったなんてのは嘘で、実際は彼女と二人で映画を見るのが楽しみで、さらにその映画に対して彼女程の知識がある自信もなかったもので、前日に見直して知識を埋めようとしたために眠れなかったただけだ。」

「そうだね、今回は前回の作品から、あの犯人がどう話に絡んで来るのかが凄く楽しみだよ。」

僕の心の中の事など意にも介さず、彼女は今回の映画の楽しみな所を僕に楽しそうに語る。

二人でそんな話を話しながら、映画館までの道のりを楽しんでいると、不意にバスが停まった。

「どうしたんだろうね？」

「わかんない、急に停まったけど故障かな? ……まさかね、そんなわけないよね。」

彼女は笑いながら僕に語った。

するとバスの運転手のアナウンスが流れた。

「大変申し訳ございません、バスのエンジントラブルにより停車いたします。復旧までにお時間がかかりますので、ご了承ください。」
なんと、ほんとにバスが故障したのである。僕の人生でバスが故障して停まった事なんてなく、生まれて初めての経験だった。

しかし、このままでは映画の時間に間に合わなくなってしまう。

「半分ぐらまでは来てるし、残りは歩こうか。歩いたら間に合うか

もしれないし。」

彼女はそういうとバスを降り、映画館までの道のりを歩きだした。すぐに僕も彼女のあとを追いつバスを降り、映画館迄の道を歩く事にした。

「でもまさかホントにバスが故障するなんて思わなかったね。私、バスが停まったのなんて初めてだよ。」

彼女は驚いたように、それでいてその特殊な状況を楽しむように僕に語った。

「ホントに驚いたよ、でも歩きだと映画館に着くのが遅くなるね。」僕は少しがっかりしたように彼女に話したが、内心はそうではない。なんせ、二人でいる時間が増えたのだ、……バスの事故？全然問題ないぜ！むしろ神様ありがとう！！……

僕はそんな事を思いながら、映画館までの道のりを楽しみながら向かった。

映画館に着いたとき、やはり予定の時間には間に合わず、最後の上映時間を見ることにした。

しかし、その映画がもともと人気ではないことや、平日の夜中の上映ということもあり、映画館には僕と彼女と一人の男性の3人しかお客がいなかった。

「人、全然いないね。ほとんど貸し切りだよ。私達以外のお客が1人だなんて、初めてだよ。」

「そうだね、俺の地元は結構都会なのもあって、こんな事絶対にあり得ないことだよ。」

僕と彼女は楽しそうに話す。しばらくすると、映画が始まった。

僕は映画よりも隣にいる彼女の事が気になり、上映中にもかかわらず、彼女の方を何度も見てしまっていた。

彼女は真剣に映画を楽しんでおり、ほとんど僕とは目が合わない。しかし、ふとした時に彼女が僕の方を振り向き、何とか視線が合っ

た。僕はその度に、恥ずかしそうに顔を伏せた。

「今日は楽しかった、また遊ぼうね」

そう言っただけで彼女は帰っていった。

僕は彼女を見送ると、部屋に入り、今日の出来事を思い出した。すると、映画の内容なんて全然頭に浮かばない。思い出すのは、彼女の笑ったしぐさや彼女との会話ばかり。

なんて事はない、僕は既に彼女の事以外考えられていなかったのだ。僕は彼女が家に着いた頃に電話をした。

「今日は映画に付き合ってくれてありがとう。また、面白い映画があったら一緒に見に行こうね。」

・・・違う、俺が言いたいのとはこんな事なんかじゃない。

「明日の大学の課題もうやった？」

・・・そんな事は今聞く必要があるのかよ！

僕は何度かためらいながら、彼女に言った。

「今、付き合ってる人いないんでしょ？よかったら、俺と付き合い合わない？俺、君と

趣味合うし、絶対一緒にいたら楽しいよ。」

僕の精一杯の言葉に、彼女は少し間をおいてからこう答えた。

「私も、君とは趣味が合うし、君の事いいと思う。付き合おうか。」

12月16日、これが彼女が【彼女】になった瞬間だった。

彼女が【彼女】になった日（後書き）

内容はほとんど僕の実話です。

みっともない内容ですが、読んでいただけたらありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0079p/>

君といた時間

2010年11月19日18時53分発行